おやじん
Vol.03
2017 11

OYAzine

親爺が作る、親爺のための、適当で、いい加減な雑誌

あなたの魂まで撮らせていただきます。

プロフィール写真・宣材写真・アーティスト写真から遺影まで。
今の旬なあなたを、人生をたっぷり生きた親爺が粋に撮ります。

編集後記

適当で、いい加減を謳う雑誌らしく久しぶりの発行となりました。しかし、今号はあのはなわさんに表紙と巻頭ページを飾ってもらいました。はなわさんとは何度か一緒に飲む機会がありました。一般的にはお笑いのジャンルに括られる人ですが、飲んで話すその内容はいつもジャンルを越えた新しいこと。そしてどうしたらそれが出来るかを田中氏に相談し、悩んでいる姿が印象的でした。二人を見ているとまるで兄弟のような感じがします。

今回は彼がプライベートで作った曲の背後のストーリーが中心ですが、やはり根が真面目な彼らしい、計算のないストレートな歌が、結果的に多くの人の心に届いたということだと思います。競争の激しいお笑いや音楽の世界は今や過剰な演出やマーケティングで飽和状態に達している感がありますが、今回の記事を読むと、嘘のない表現が一番人に伝わるのだとあらためて思いました。

最近は政治の世界も混沌としていますが、きっと私たちが望んでいるのはきれいな言葉や理論ではなく、体で感じられるストレートな言葉を吐くリーダーの登場なのではないかと思います。

浪花節という言葉は死語になりつつありますが、こんな時代だからこそ「浪花節だぜ、人生は」であります。（島）

企画・編集・デザイン：島製作所　発行：島 隆志　記事中のクレジットがない写真：島 隆志
ご意見・ご感想は●mail:oyazine@shima-f.com　Facebook:OYAzine で検索
有限会社 島製作所　〒106-0032 東京都港区六本木 3-4-35　落合三幸ビル 2F　http://www.shima-f.com

親子のブルース

佐賀県出身という共通点からはじまった‘はなわ’との付き合いも、かれこれ10年以上になる。不思議なことに、グアム旅行中にTV番組で来ていたはなわファミリーに遭遇したり。つい最近も「今日はどこですか？」とLINEが来たので「岡山なう！」と返信したら「え？僕もです!!」ときて合流し、同じホテルから翌朝、佐賀へ二人で向かったり。まさかの偶然が、実によく重なる友人である。

そのはなわが今、『お義父さん』という新曲でブレイクしていることをご存じだろうか。今年の春、ライヴ映像をYouTubeにアップ後、わずか20日間で再生回数100万回を突破。「何度聴いても泣ける」と各方面から絶賛され、5月に急遽CD発売と相成ったシングル曲だ。そして、この大ヒットの裏側にも、事実は小説より奇なり、そんな出来事がこれでもかと重なっている。

高校を卒業後、はなわはお笑いの専門学校へと進学するために佐賀から上京。講師の一人が現所属事務所のマネージャーだったことから在学中にスカウトされ、三段跳びで芸能界入りを果たした。

「こともあろうにその先生から〝事務所に入れたのだから、学校はもう辞めていいよ〟と言われて、後先考えずに中退しちゃったんですよね。そうなると即‘社会人1年生’じゃないですか。当然、生活費は自分で稼がなくてはならないわけで、ネタづくりの合間に、皿洗い、ティッシュ配り、引越作業員…いろいろなアルバイトで何とか食いつなぎました」。

生き延びるだけで精一杯だった、そんなある日、大迷惑な一通の封書が届く。佐賀に住む親友からの結婚式の案内状だ。情に厚い彼はなけなしの貯金をはたいて出席する。そこに、である。神様の思し召しが待っていた。

「嫁の智子は1学年上の先輩でして、当時はまさにアイドル的な存在で、僕の初恋の人だったんです。もちろん告白しました。苗字が嫌だ、と瞬殺でフラれてしまいましたけど。ところがです。この披露宴に彼女も来ていて…ならば！と再トライしてみたら、まさかのOK牧場！」。

こうして〈佐賀⇔東京〉の遠距離恋愛がスタートする。が、事務所に所属しているとはいえ、まだ稼ぎのないお笑い芸人。給与といってもスズメの涙で、東京と佐賀を行き来するお金などなかった。

「約2年間は〝文通〟でしたね。そして、ちょっとだけお金を貯めて、東京でデートしようと航空券を送ったんです。でも、片道しか買えてなくて…。当然ながら智子は帰る予定でクルマを佐賀空港の駐車場に停めたまま。しかし、お互い、帰りのチケットを買えるお金は持ち合わせていない。というわけで、そのまま同棲生活に突入することに…かなり無茶苦茶な展開でしたね」。

住まいは風呂無し木造アパート。いつ芸人として売れるとも知れないまま、二人でアルバイトしながらやりくりし、2年後、智子さんは長男‘元輝’くんを懐妊。結婚式も挙げないまま入籍することになる。はなわといえば誰もが知る楽曲『佐賀県』。この大ヒットで全国に名を馳せ、紅白歌合戦にも出場した。しかし、それは入籍から3年も後のこと。そこに到達するまで、子育てしながらの厳しい生活が続いたことになる。けれども、智子さんは、そんな毎日でも幸せだったという。ところが突然の大ヒットで、思いもよらぬ収入を手にすることに。貯金通帳を見てその報酬に驚愕した彼女は、ある日、とんでもない行動に出た。

「十分に幸せな私たちが、こんな大金をいただいてはいけない。お金を必要としている人が、もっと世の中にたくさんいるはずよ！」。まあ、いつもの独り言だろうと気にも留めずに仕事に出かけたら、その日のうちに寄付してしまっていた。その額、なんと壱千万円!!

三人の子宝に恵まれ、今や柔道一家としても広く知られるはなわ家。『お義父さん』は2年前の智子さんの誕生日にプレゼントした曲だ。

「泣いたりするのが大嫌いで。子どもたちの前に僕がギターを持って現れた時は、やめてやめて！みたいな感じだったんですけど、どうにか聴いてもらえることになって。〝この歌は、智ちゃんのお父さんに宛てた歌です〟と言ってイントロを弾きはじめたら…嫁が、げっ⁉という表情になってるんですよ。ここで中止されても困るので、気づかないふりして歌いはじめました。そうしたら、途中から号泣しだして。こんなに泣いている嫁をそれまで見たことがなかったので、僕も感極まって大泣きしながら歌いました」。

最初はほのぼのとした家族ソング…と思いきや、実は2歳の時に父親が家を出ていき、その後の智子さんの苦労や頑張りを伝えるこの歌。この初披露の直後、智子さんから衝撃的な事実を告白されることになる。

「実は1週間前に親戚から電話があったの。お父さんが末期ガンであなたに会いたがっているんだけど、会う気ある？て聞かれて…パパや家族に迷惑がかかるかもしれないから会わないって断ったのね。でも、このタイミングで、こんな歌を作ってもらった…ということは、やっぱり会いに行けってことなのかなぁ…」。

お義父さんは佐賀市から車で2時間くらいのところに暮らしていた。末期ガンだけに辛そうではあったが、智子さんの実父であることは、はなわの目にも疑う余地はなかった。

「途中までは本当に穏やかに話していたんですが、急にお義父さんが〝俺のこと、恨んだろう？〟と涙を流しはじめたんですよ。そうなると嫁もポロポロ泣いちゃうし。さらに直接関係ない俺が一番泣いちゃって」。

後日、長男・元輝くんの柔道の試合に応援に駆け付けたお義父さん。そこで、歌詞にも登場する智子さんのヤンチャなお姉さんにも再会することになる。自分たちを置いて出て行ったことを激しく攻めたりしないだろうか？そんなはなわの心配をよそに、40年もの時を越えて、何事もなかったように普通に会話をする父と娘たち。その隣には「おじいちゃんに初めて会えた」と喜んでいる孫たちがいて。血の繋がりというそこはかとない縁を感じたという。

「単独ライヴのセットリストを作っている時にマネージャーが『お義父さん』も入れましょうよ、と言ってきて。基本的に俺〝お笑い〟ですから、こんな曲やってもどうかなぁ、と不安だったんですけどね。まあ、せっかく作ったんだし、アンコールでならいいか、と歌ってみたら、会場内にすすり泣く声があちこちで聴こえてきて…。これにはビックリでした」。

そして、昨年の智子さんの誕生日、つまり涙の初披露からちょうど1年後、ライヴで歌った『お義父さん』を〝智ちゃん、お誕生日おめでと！〟という想いを込めてYouTubeにアップした。その途端、堰を切ったように拡散していく。予想もしなかった事態に一番驚いていたのは、はなわ本人。確か、まだ3万回再生くらいの時だった。

六本木の居酒屋でハイボールを飲みながら「渋谷のLIVEで歌った『お義父さん』という曲、あったじゃないですか。YouTubeに上げたら反応が良くて、メチャいい感じなんですよね。この曲を作ったことで、お義父さんと智子も再会できたし、息子たちもお祖父ちゃんに会えたりして。何かを手繰り寄せるというか、不可思議な力を感じるんですよ、マジで」。そこから再生回数が急上昇。これがレコード会社の目に留まり、2カ月後にはシングルCDに。以降、お見舞いに行くたびに「紅白で『お義父さん』が聴けたら嬉しいな。それまではまだ逝けないわぁ」と話していたお義父さん。その願いを叶えてあげたいと全国各地でCD販売のプロモーションに走り回っていた10月8日、無情にも訃報が届く。

「告別式には家族みんなで参列して、お義父さんの親族の方から『お義父さん』を歌ってくれないか、とリクエストがあったので、親戚一同を前に歌わせてもらいました。途中、涙が溢れてしまって、まともに歌えなくなってしまいましたけど…。なんとか最後まで歌いきった時、心の底からこの曲を作って良かったな、と思いました。知る由もなかった親戚の人たちと息子たちが、目の前で楽しそうに繋がっている。ああ、意味があったんだ、と」。

この原稿の最後の仕上げを出張先の沖縄のホテルで書いていたら、LINEの着信音が鳴った。はなわからだ。「今日はどこですか？」。いつものように「那覇なう！」と手短かに返すと「マジっすか！ちょうど僕も那覇なんですよ」。またひとつ重なった偶然。今宵は、この不可思議な縁に乾杯！ そんな気分だ。

（田中 公仁郎）

筆者プロフィール
佐賀県出身、54歳。起業家／コピーライター／プロデューサー
28年前、六本木に広告制作会社を設立。以来、六本木を本拠地に精力的に活動。その傍ら、芸能プロダクション、居酒屋、ガールズバー、海外ホテル、海外フリーペーパー、格安名刺印刷、リラクゼーションサロン、健康飲料販売、さらには音楽プロダクションまで、様々なビジネスを仕掛ける。

カプリチョーザの本多さんのこと

写真提供：伊太利亜飯店華婦里蝶座

昨晩、家族でカプリチョーザというイタリア料理屋に食事に行った。

現在ではチェーン展開しているカプリチョーザだが、私の学生当時は、渋谷の場外馬券売り場の近くに一店舗だけ。予約を受けない行列のお店だった。オーナーシェフの本多さんとフロアを仕切る〝しげ〟さんの男二人で切り盛りしていた。

初めて行ったのは20歳の時、当時のガールフレンドが連れて行ってくれた。カウンターの席に座り、あれこれ注文すると、キッチンから垂れ目のコックさんが、そんなに食べきれないよ、と忠告してくれた。それで少し品数を減らしたが、それでもまだ、多すぎるんじゃない？と言われた。私は、大丈夫です、と答えたのだが、出てきた皿を見てびっくり仰天。スパゲティーは巨大などんぶりから溢れんばかり。普通のの3～4人前はあろうかというヴォリュームだった。でもとても美味しかったので、結局全部たいらげてしまった。すると垂れ目のコックさんは、空になった皿を見て、〝ふーん〟という顔をした。それがオーナーシェフの本多さんだった。

美味しくて、お腹一杯になって、学生でも通える値段。それからは、その店が大好きになり、しょっちゅう通うことになった。少なくとも週に二回、多いと三日連続、なんてこともあった。二度目に行った時のスパゲティーは、一度目よりも更に量が増えているような気がした。それでも全部たいらげると、三度目、四度目、とどんどん量が増えていき、最後にはどんぶりからこぼれ落ちない物理的な限界まで盛られている、という感じになった。懐の寂しい時などは、男二人でスパゲティー1人前あとは〝水！〟なんて注文しても、それでもお腹一杯になるくらい盛ってくれて、食後のコーヒーはサービスだった。

当時カプリチョーザから歩いて行ける距離に、ただでビリヤードができるバーがあり、我々はお腹一杯になるとたいていそこに行って、ジントニック一杯で夜中までビリヤードに興じていた。24時頃になると、店をかたずけた本多さんがそのバーに顔を出すことも多く、言葉を交わすことも増えたが、一緒にビリヤードをしたことはなかった。

本人が自分の口から説明してくれたことはなかったけれど、本多さんは、60年代にイタリアで修行、大阪万博のイタリア館のシェフとしてイタリア政府から日本に派遣された、という驚くべき経歴の人だった。

ところがその後私は、就職と同時に地方の配属となり、カプリチョーザに行く機会はめっきり減ってしまった。そして丁度その頃、カプリチョーザがフランチャイズ展開する、という話が広まった。その話を聞いて、私はとても残念な感じがした。本多さんが金儲けのことを考え始めたのかよ、と思ってしまったからだ。その後しばらくして、久しぶりに渋谷の本店に行った時には、本多さんの姿も、しげさんの姿もそこにはなく、見たことのない若い店員さんが働いていてとても寂しい気持ちになった。ほどなくしてカプリチョーザのチェーン展開が始まり、店舗数は急激に増え、評判はどんどん広まっていったが、私自身は本多さんのいないカプリチョーザに行く気にはなかなかなれなかった。

そんなある日、本多さんが亡くなった、という話が耳に入ってきた。私にとっては寝耳に水だった。その時初めて、本多さんが不治の病におかされ、余命に限りがあることを宣告されたがゆえに、自分の味を誰かに託したのだと知った。

本多さんの愛車は3台。シトロエンSMとCX。それにポルシェ928だった。ポルシェはあくまで、シトロエンが2台とも不調の時のスペアだから、愛車とは言えないなあ、と笑っていた。

こんなことを思い出したのは、昨晩会計カウンターの後ろに飾られている本多さんの写真の横に、享年44歳、と書かれているのを見つけたからだ。私も1ヶ月前に44歳になった。本多さんが亡くなった歳に追いついてしまったのだ。本多さんが44年の人生で私を含む多くの人の心をどれだけ豊かにしたか。それどころか、亡くなっても尚まだその料理は、私の愚息も含む本多さんのことなど知らない多くの人々の人生を豊かにし続けている。

私のこれまでの44年は、本多さんにのそれとは比べるべくもないけれど、本多さんから教わった多くのことはこれからも私の中で生き続けていくだろう。そしてまた自分も、誰かの人生を少しでも豊かにすることができるように、という思いを新たにした。

この夏私は54歳になった。この文章は10年前の2007年8月31日に某SNSに書いたもの。

これを書いてから10年間、夏の終わりになると自分がこの文章を書いたことを思い出す。しかしその間に、私は当時必死で取り組んでいた仕事を追われ、家庭を壊し、何人かの人と決別しながら何とか生き延びてきた。本多さんより10年も余分に生きてきたけれど、誰かの人生を豊かにするなど程遠い10年だった。

しかしその10年に、決別したよりずっと多くの人に出会い、その出会いは私を豊かにしてくれている。そう感じるたびに、10年前にこの文章を書いた時の気持ちを思い出さなければと思う。

（斎藤　陽）

筆者プロフィール
昭和38年、東京生まれ。高校大学時代を通じ雑誌ロッキング・オンに執筆。卒業後自動車会社勤務、零細運送会社社長を経て、現在商社シンガポール法人勤務。

ナポリタン・キャン・ネバー・ダイ

Neapolitan can never die

懐かしい、という感情というか感覚は、案外当てにならないのではないかと思っている。「レトロ調」という言葉があるように、ちょっと時代を感じさせる意匠をデザインの中に盛り込んだ製品を見ると、そんな製品を子供の頃に見たわけでもないのに、何となく懐かしい気分にさせられたりする。私は「ツバメノート」を愛用しているけれど、それは大人になってからで、子供の頃には見たこともなかった。身の回りにある大学ノートはコクヨ製だったし、愛用していたのはキャンパスノートだ。でも、ツバメノートの表紙はノスタルジアを感じるし、キャンパスノートを見ても特に感慨はない。そういう感覚とは別に、キャンパスノートという製品の性能の高さやデザインの見事さが分かるようになったのは最近だが、それはまた別の話だろう。そういう事があるせいか、私は懐かしさという感覚に常に懐疑的になってしまう。ノスタルジーは捏造しやすいのだから。

例えば、スパゲティナポリタン。あれを昭和の懐かしい食べ物とする向きがあるけれど、本当にそうなのだろうか。まあ、スパゲティという言葉が既に懐かしいとする考え方はあるだろう。しかし、スパゲティナポリタンは、置き換わるべきパスタメニューが無いのだ。アラビアータとかボロネーゼとかペスカトーレとか、まあ、似たような名前のパスタはあるけれど、どれも全く別物だ。つまり、スパゲティナポリタンを食べたかったら、スパゲティと言うしかなく、その意味で、スパゲティもスパゲティナポリタンも十分言葉として現役なのだ。そもそも、私が、大阪の日航ホテルの隣にあったイタリア料理屋でボンゴレビアンコを食べて感動して、滞在中毎日食べていたのは、もう、25年前で、確かに年号は既に平成だったけれど、ボンゴレなんて昭和の時代に既に普通だった。もっとも、私が高校の頃までは、佐賀では食べられなかった。博多に行って食べていた。その頃、東京では、箸で食べるスパゲッティでお馴染の「五右衛門」が行列店になっていて、たらこスパゲティが全盛の時代だ。そして、たらこスパゲティも、やっぱりたらこスパゲティとして、現在に至っている。それでは何故、スパゲティナポリタンにはノスタルジアが染みついてしまったのか。かつての相棒であったスパゲティミートソースは、ボロネーゼと名を変えたり、単にミートソースと呼ばれたりして、まるで懐かしさを感じさせないまま現役感を振りまいている。取り残されたのがナポリタンである。別に、もう日本の料理屋のメニューから消えてしまったわけでもないのに。

２００９年、エースコックから「イタリアン焼きそば」というカップ焼きそばが発売された。その試食レポートを書く仕事を依頼された私は、「何だかなあ」と思いながら食べて、その旨さに驚いた。何だかもう、カップ焼きそばでナンバーワンじゃない？というくらい旨かったのだ。しかし、これはカップ焼きそばなのだろうか。麺こそ、細目ではあったけれどカップ焼きそばのもの。そこにケチャップベースのソースをかけて、付属の粉チーズをかけて食べる。味は、そのままナポリタンだ。ご丁寧に具材にはピーマンとタマネギと肉そぼろが入っている。そこに私はウインナーを炒めて投入した。完全にナポリタンである。そして旨い。そして、この流れは２０１４年の「ペヤング ナポリやん」と、マルちゃん「昔ながらのナポリタン焼きそば」、２０１５年の「ナポリタンＵＦＯ」、２０１６年の「日清焼きそば　下町ナポリタン」と続き、そして今年も、マルちゃんの「ajito ism ピザ味まぜそば」が発売されている。この流れ、意外に定番化しているのだ。焼きそばだろうと、スパゲティだろうと、まぜそばであろうと、日本人はナポリタンが好きなのだ。

しかし、カップ麺でさえも、商品名にノスタルジアが付け加えられている。ナポリタンは、ナポリタンであるというだけで、ノスタルジアの呪縛から離れられない。しかしこれは、ナポリタンのせいじゃない。多分「トマトケチャップ」のせいなのだ。スパゲティナポリタンとは、要するに、パスタをケチャップで炒めて粉チーズをかけたもの。この、「ケチャップ」と「粉チーズ」が、とてもノスタルジックなのだ。もちろん、どちらも、今でも普通に売っている。しかし、山のようにケチャップを使う料理なんて、今ではスパゲティナポリタンとメイド喫茶のオムライスくらいのものだ。粉チーズは、今はパルメジャーノレッジャーノをおろしたりするのが正しいのだろう。ここにピーマンで香りを付けるのも、懐かしさを演出する。このケチャップとチーズが混ざった味こそが、昭和なのだ。しかも、新しい昭和。昭和が新しい時代へと動こうとしていた70年代以降に子供が食べていた味なのだ。チーズが、ケチャップが、洒落たものだった時代。橋本治の「桃尻娘」には、ロールキャベツをケチャップで作る若い奥さんに対し「トマットピューレを知らないのかしら」と若い娘が批判するシーンがある。パスタ専門店のトマトソースは、当然、トマトを潰して作っている。既に、昭和の終りには、ケチャップには衰退の影が見える。そして、粉チーズは意外にも価格がそれなりにするせいか、家庭でたっぷりと使うという常識は生まれなかった。その証拠に、今でも「粉チーズ」として売っているのは、大きいパッケージでも80ｇしか入っていない。カルボナーラを２人分作るのに必要な粉チーズは、約50ｇだというのに。私は、スパゲティナポリタンに３０ｇ以上、チーズをかけるというのに。使用量とパッケージが見合っていないのだ。カレーとコーヒーというのは、今や市民権を得ている。神保町は良い仕事をした。しかし、かつての喫茶店の王者はナポリタンだったはずだ。懐かしいというキーワードで過去の食べ物のように扱うことで、ナポリタンとコーヒーの組み合わせが、どれだけゴールデンなのか、人々は忘れてしまったようだ。それは懐かし補正ではないのに。だから、懐かしさは疑わなければならないのだ。（納富廉邦）

筆者プロフィール
昭和38年佐賀市生まれ。立教大学在学中よりフリーライターとして娯楽全般をフィールドに執筆、現在に至る。東京ハイボールズのリードギター担当。近著「40歳からのハローギター」（幻冬舎）

ここ何ヶ月間というもの、仮想通貨ビットコインのデイトレードに現を抜かしている…

二十四時間ノンストップの相場に目をしばたたかせながら… 四六時中やってくる書き入れ時と罠… 千載一遇のチャンス… 飽和した社会に久々に訪れた拡大市場… 熱に浮かされたような人々… 何といっても楽しいのだ、損をしたときでさえ… 結局のところギャンブルではないかって?… まああるいは、相場だからね… でもそれだけじゃない…

ビットコインの価値の源泉については諸説飛び交っている… 金のようなものなのだ… 大々的なネズミ講なのだ… 要は電気代本位制なのだ… どれも興味深い説だが、それらを濾過した後にもまだ、残るものがある… 人々を魅了する自由の感覚が… 無価値なものに価値が付け加わるときの興奮… そう、これほどまでに自らが無価値であることを前面に押し出しているものも珍しいのだ… チューリップの球根と比べたって、何物でもない… おかげで、どんな値段が付いてもそれが相応しいように見えてしまう… オートクチュールをまとったモデルのように… あるいは古代人が釣り針と交換した貝殻みたいに… 僕としてはビットコインの価格が吊り上っていくときの感覚を、絵画のオークションと比較してもいいと思ったくらいだ… ぼろ雑巾のような姿になって南フランスの小道を歩いていた男の絵に、百億を超える値が付く瞬間に…

法整備が追いついていないため、市場はさながら無法地帯の様相を呈している… 買い煽りや売り煽り… 風説の流布… 底なしに思える暴落… 仕手筋や、海外から流れ込む謎の大口資金… 流行りものにつられてやってきた投資のトの字も知らない素人が、魑魅魍魎の渦巻く魔界に突如として投げ込まれるのも、仮想通貨ならではなのだ… もちろん実際にやってみれば素人だってしっかり自分の取り分を掴むこともあるし、プロだって負けるときもある… 取引所のチャットルームを覗けば、見事に種々雑多な会話が乱れ飛んでいる… 何という思いがけない社会勉強… 特に、日本人は集団心理が強く、投資よりも労働に長けていて、一皮剥けば誰でも似たり寄ったりだなどというマスコミの宣伝を妄信していた者は、億単位のトレーダーがゴロゴロしているチャットルームで途方にくれることになる… 誰かが面白いことを言っていたな… 「ファミリーレストランで食事をしている人と、モナコで海を眺めながら食事をしている人とが会話しているようなものだから、カオスになるのは仕方がないわね。」… 言い得て妙だ、仕方がない… 僕自身、好みとしてはモナコに惹かれるが、現実問題として今まさにファミリーレストランで食事をしているところだしね… チャートを映し出すスマートフォンをテーブルの脇に置いて… チャットルームの向こうにモナコで食事をしている一人の日本人女性を想像しながら… 地中海… 大型客船の間を駆けまわるヨット… 水面に反射する光… そうだ、さざなみという意味のリップルという仮想通貨もある… 他にも、イーサリアム、エルではじまるリスク、モネロ、ネム… 新しくもロマネスクな名前の数々… そう、仮想通貨は新しくも古い、根源に根差した何かだ… 成長しない何か… 価値とは別の何か… 所有することを熱望させながらも所有すること自体からこぼれおちてゆく何かだ… 仮想の対義語が現実だと考える者たちには、永遠に理解されることのない何か… ここ百年、世界の経済を牛耳ってきたプロテスタントの金融至上主義者には到底理解できないのだろう… 彼らはこんなものは所詮バブルだといって負け惜しみを言うしかない… もちろんビットコインはびくともしない… だってはじめから存在自体がバブルの権化なんだから… バブルか、さもなくば死か… バブル オア ノットトゥ ビー… 文字通り、南の海の泡沫… 摩天楼が立ち並ぶ地平線の彼方で… はじけては消える永遠と現在の証… ほら…

そういえばチャットルームで誰かが言っていたのは、ミクロネシアで今でも使われている大きな石のお金、石貨のことだった… 草むらの中に無造作に放置されている石貨… そうだね、確かにビットコインを見ていると、あれのことを思い出す… 石貨はそれで何かを買うというより、村に起こった出来事の集積、物語の登記簿のようなものなのだと思う… ヤシの木の売買、結納、殺人事件の賠償金… 村人たちの記憶を呼び覚ます、奇妙な記録媒体… そしていちばん重要なことは、石貨は村人たちにとってとても「大切」なものだということだ… 我々がどこかでお金は「汚い」ものだと信じ込まされているのは、市場経済に特有のある種の抑圧が働いているからなのだ… 何が抑圧されているのかって?… 実は抑圧が働くところ抑圧されるものは常に物語の重層性に他ならないのである… 物語は起承転結のように線的になっていなければならない… 物語は解釈可能なものでなければならない… どうしてそんなことをしなければならないのか、理由は単純で、フィアット(法定通貨)にまつわる物語を否応なく飲み込ませるためなのだ… だからこそ、特定の物語を押し付けることのないビットコインがひときわ自由を感じさせるのも何の不思議もないことなのだ… お金は資本主義がそう信じ込ませているように欲望の未来への繰り延べではない… それはもっとはかなく、過去と未来を同時に刈り取る人々の営みそのものだ… ビットコインの冒険は見かけよりはるかにラディカルだから、いずれ人々がその事実に気付いたときには、徹底的に弾圧される可能性があることも覚悟しておかなければならない… 暴落を繰り返して消滅してしまうかもしれないし、主導権争いと分裂を繰り返しフィアットのウェブ版のようなものに収まってしまうかもしれない… でも今二〇一七年に起こっている熱狂は本物だ… そこに垣間見えた、古くて新しい人間の姿も、決して錯覚ではないのだ…

（栗原 明志）

筆者プロフィール
昭和46年、東京生まれ。作家。

朽ち写し ❹

カメラマンになりたての頃から錆びた鉄に惹かれて、いい具合の錆びが見つかると撮ってきた。写真の錆びた鉄片は骨董市で一片百円で売っていたもの。店主によれば、最近は男性よりも女性が買うらしい。鉄の長所はは頑丈である。そして短所は重くてさらに放っておけば錆びることだ。しかし、ここが鉄ならではの魅力でもある。人の手に触れ続ければ鈍く光り、風雨にさらされればその表面には複雑な表情の錆が生じる。さらには形さえも変えていく。鉄は無骨で寡黙であるけれど、まるで生きているかのような常に変化し続ける途中の美学がある。

途中の美学。

女優 伊澤恵美子と散歩する

昭和な散歩

その四 鶴見線

以前ある仕事で横浜の鶴見の印刷会社で色校正に立ち会うことになった時、代理店の担当の人が「島さんに見せたい場所があるから鶴見線の国道駅で待ち合わせをしましょう」と言われた。国道駅という名前からして昭和っぽい名前だったのでたぶん古い駅なのだろうと思った。

鶴見線はJRの鶴見駅が始発駅で、主に京浜工業地帯の工場に勤める人たちの通勤に使われている路線だ。先はいくつかに分かれて横浜と川崎の工場エリアにまたがって走っている。終点のひとつである海芝浦駅は東芝の敷地内にある為、一般の人は改札から外へは出られない。そんな特殊な路線で鶴見駅から二つ目、数分で到着する国道駅はまだ工場地帯に入る手前にある国道15号線を跨ぐ高架の駅だった。

電車から降り、ホームから階段を下ると、すでにその階段が普通ではない。半端無く古いのである。改札は無人だがSuicaの簡易改札機だけが設置してある。改札を出るとそこはまるで昭和を舞台にした映画のセットさながらの異様なまでのレトロな空間に包まれる。実際映画などのロケ地で使用されたり、テレビでも何度か紹介されているらしい。駅の下は煉瓦作りのアーケードになっていて、その両脇にはかつて店があったと思われるが、ほとんどはベニヤ板で覆われている。焼き鳥屋が一軒営業

▲00号の撮影時に森口氏は自分のカメラでも風景をスナップしていたが、今年やった個展ではそこに少女を配した絵が展示されていた。大川駅の同じシチュエーションでの絵と写真。

▲ペンキの剥げた大川駅の駅舎の前で。

▲貨物の引き込み線の線路にて。

▲鶴見線は夕陽が似合う路線である。

▲▶扇町に並んで建つ町工場の前で。撮影は2012年。

▲アーケードの通りは周辺の住民の人たちの日常の通路として使われているようだった。

▲ホームから降りる階段は、過去にタイムスリップする入り口でもある。

▲国道駅のホームとアーケードにかつてあった不動産屋の手書きの看板。

しているのと、住居らしい入り口が見えた。ネットで検索して調べてみたら、その外壁には戦時中の機銃掃射の痕が残っているらしい。

後日、伊澤さんをモデルに鶴見線沿線で撮影をした。走っている車両自体はさすがに今風にはなっているが、ほとんどの駅が無人駅でまるで地方に来たような錯覚を覚える。どの駅も横浜や川崎にあるとは思えない小さな駅だが、中でも僕のお気に入りは終点のひとつである大川駅である。夏場は駅周辺が草で覆われて廃駅と言われても頷けるほどである。木造の駅舎もペンギが剥げかけたままだ。勿論無人駅だからホームへの出入りは自由であり、ここにはセキュリティという言葉は存在しない。撮影も自由だ。(と思っている)ちなみに本誌の00号の表紙と巻頭の森口さんの写真もここで撮影した。

主に工場勤務の人達のための特殊な路線ゆえに、結果として昭和のままの姿を残しているだけだが、こんな時代だからこそこんな管理のゆるい、かつ情緒溢れる路線をこのまま残しておいてもらいたいものだ。

伊澤恵美子プロフィール
9歳から舞台に上がり、モデル・女優として活動。映画「子宮に沈める」主演、日タイ国際共同製作映画「アリエル王子と監視人」主演他ドキュメンタリー映画「ちいさな、あかり」企画など多岐に渡り活動中。熊本市PR特命大使。
FB : izawaemiko Insta : emikoizawa

バード電子のバードはチャーリーパーカーのニックネームだった

その4

「音楽を好きになる前のはなし」

はじめての録音

「ギイーッ、チョン、ギギギ!」キリギリスが鳴いた。

「こんなもの録音して、どこが面白いんだよ!」S君が言った。

「しっ!ダメだよ、録音に声が入っちゃうじゃないか!」

コオロギも鳴きだした。「コロコロコロコロコロ、コーロコロ!」

「よく、知らない家にコンセント借りられるな」

「しっ!ダメだよ、録音に入っちゃうじゃないか!」

あの日、嫌がるS君を誘い自転車で神居岩に向かった。キリギリスの声を録音するためだった。神居岩というのは地名ではなく、大きな石の名前である。その石の名前にちなんだ神居岩温泉という一軒宿があった。元々はアイヌの温泉だったらしい。カムイ(神)である。当時、知らなかった僕はその場所を「かもいわ」と呼んでいた。本当は「カムイワ」だった。

S君の荷台にはSONY高級カセットデッキ。S君宅の4チャンネルステレオのオプションだった。僕はステレオレコーダーを持っていなかったのでS君と共に連れ出すしかなかった。畑の中の一軒家に行き「すみません!コンセント貸して下さい」とお願いした。

中学2年の夏に生録(ナマロク)というものを知った。ナマロクとはマイクを使って音を録音する事だが、今では簡単な事も当時はこれが新しかった。ナマロクはちょっとしたブームとなり「ロクハン」というナマロク専門雑誌まであった。僕は、キリギリスを録音した翌年に乾電池で動くステレオレコーダー『デンスケ』を入手して(正確には弟のこずかいで買ったものを借用)廃止間近の蒸気機関車(SL)を録音するために室蘭本線へ通った。1年前に苫小牧に引っ越したY君と岩見沢で合流し駅前の公園に野宿しSLを追いかけていた。

その年の秋にはSLが引く旅客列車が全て廃止となり、12月にはSLが引く貨物列車も廃止された。最後のSL運行が終わりしばらくして新聞で、SLが走っている内容の記事を見て目を疑った。読むと、SLは本線を走っているわけではなく、駅の構内で貨車の入れ替え作業に使われている内容だった。それも3月までらしい。終ったと思っていたSLがまだ走っているのだから、本線であろうが駅の構内であろうが録音するしかないと思った。最後の最後だと思い、ありったけのカセットテープと乾電池をかき集め国鉄最後のSL基地となった追分駅に向かった。中学校へは母が電話してくれた「息子は風邪で休みます」と。母はこの2年後にもエリック・クラプトンのコンサートへ出かける僕のために「息子は風邪で休みます」と高校に電話してくれている。

追分に行く

SLに興味を持ったのは、小学3年生の時で従兄弟のひろし君に連れられ機関区を見学した時からだった。ひろし君は父親が国鉄職員だったので職員達と顔見知りだった。国鉄の施設の中に顔パスで入る事ができ、一緒にディーゼル機関車の操縦席に乗ったり機関庫の中に入ったりした。その時に撮った写真のネガは今も持っている。

初期型D51はなめくじ型
1969年留萌機関区で撮影

6両しか作られなかったD61型
1969年北海道留萌機関区で撮影

1976年2月 画像左端に立っておりました。(撮影は全て筆者)

D5162ナメクジ型、D613。

留萌から追分までは、列車の接続本数が少なくて4時間ぐらいかかる。朝の通学時間を避けて誰にも会わないように列車に乗った。追分に行ったのは3度目で、前の年の12月24日『国鉄最後の貨物牽引SL』以来だった。追分は北海道では南側に位置するので雪の量は少なめだったが、夕方にかけマイナス5度ぐらいまで下がりじっとしていられない冷え込みになった。マイク用の三脚を立て、音をたてないように静かに待つ。帰路の終電まで2時間、雪の中に立ちっぱなしだった。息が凍り、足の指先が冷たくなる。手袋の中の指先の感覚がなくなった。最後のSL79602がやってきて僕の目の前で汽笛を鳴らした。音が大きすぎてデンスケのレベルメーターの針が振り切った。機関士がサービスのために鳴らしてくれたのだろう。79602は汽笛を鳴らしながら何度も僕の前を通り過ぎた。

悲しい事件

追分の最後のSLを見届けから2ヶ月後、追分の機関庫が全焼した。その火災で追分所属のSLのほとんどが燃えてしまい、最後の貨物を引いたD51241も入れ替えの79602も他の保存先の決まったSLも無残な姿になってしまった。悔しさを共有できる仲間もなくSLへの思いはそれが最後となり、僕は高校生になった。追分で録音した音はそれから20年以上聞き返される事もなく、実家の押入れの奥に眠ることになった。

雪を踏みしめる足音、駅構内の業務放送、職員の声、夕張行きのディーゼル気動車の音、最高のロケーションだ。そこには雪の中には一人録音する自分がいる。社会人になり結婚して子供が生まれ、もう十分に大人になってからカセットテープを聞き直した。不思議な事にカセットテープを聞いた少し後に、最後のSL79602のナンバープレートと再会した。仕事中にふらりと立ち寄った交通博物館(当時秋葉原)のガラスケースの中で。

SL廃止の2ヶ月後に全焼した追分の機関庫

【特別展示】

国鉄最後の蒸気機関車79600 2のナンバープレート

「なんだ、一緒に上京していたのか」

(斉藤安則)

最後の3両の79602

SL六両、無念の"野辺送り"

栄光のD51、黒こげ

ファンの夢消える

追分機関区
機関庫焼く

機関区の火災を報じる当時の新聞の切り抜き

筆者プロフィール

昭和35年、北海道生まれ。株式会社バード電子代表取締役。23歳で電子部品設計製造の会社を設立。18歳の時にロックファンをやめジャズファンになる。高柳昌行の晩年に永くファンであった事を告白、2年間ライブに同行し、記録用にビデオ撮影を行う。現在は高柳昌行専門のレーベルJINYADISCを運営。不定期に未発表音源のCD化を続ける。

※当時斉藤少年が録音した音源は[iJockey国鉄最後の蒸気機関車基地「追分機関区」]というタイトルでiTune storeで購入出来ます。ステレオ録音でかなりの臨場感があります。(島)

f なグラビア

膝の裏に潜む
きみの人生を
ちょっと舐めてみた。

膝の裏側の窪みを「ひかがみ」と呼ぶ。そんな場所にちゃんと名称があることが日本らしいと思う。漢字で書くと腸と書く。「よほろ」とも読むらしいが「ひかがみ」がフェチにはしっくりくる。「引き屈む」の音が変化した言葉らしい。膝窩（しっか）、膝膕（しっかく）とも言う。

しかしなぜか最初は勝手に「姫鏡」と書くものだと思っていた。もしかしたらどこかで誰かが当て字をしたのを見たのかもしれない。「姫鏡」はそこに女性の本質が写るからだろうという勝手な解釈をして納得していたが、それは都合の良い解釈で膕は男にもあるのだ。だが膕という字も良い。むしろこの難しい漢字の方が奥深くてよいと思うようになった。（姫鏡の本当の意味は持ち手が付いた女性用の手鏡のことで「ひめかがみ」と読む）

数年前に１０４歳で死んだ明治生まれの祖母が生前、何かの折に「今の女の娘は平気で膝の裏を見せているが、それはほんとは恥ずかしいことなのよ」と言っていたのを思い出す。昔は膝から下の脚を見せることすら恥ずべきことだったのだ。今では膝の裏を見せることは当たり前だが、実際「ひかがみ」は汗もかくし、折り曲げる間接の裏側だから皺もあり、いわゆる美しいとされる部分ではない。だから祖母にとったら隠すべき箇所だったのだろう。

しかしそれ故に脚フェチとしたらそこは脹ら脛同様にエロティシズムや人格が滲み出る（と思う）重要な部位である。

秘すれば花、隠すからこそそこに神秘さ（エロティシズム）が生まれるのだ。（島）

熊本のカメラマンの日々

市場の平六食堂

今日の昼飯は、どこで済まそうか？と思っても、スタジオの近くの何カ所かで済ます事が多く、特に何の感情も湧く事はない。

たまには知らない店に行ってみようと、車で15分程のところにある、熊本駅西側の田崎市場に行く事にした。40数年前の高校生の時、カメラやレンズを買う為に毎年冬休みになると魚市場のアルバイトをやっていたので、雑多な広い市場の中も迷う事はない。その中で今回行ったのは、立地条件は最悪！女性客率０％！の「平六食堂」。

以前からこの店の存在は知っていたが、そのあまりにも立地条件の悪さから入店した事はなかった。その食堂の隣が日の当たらない古いコンクリート造りの公衆便所があるからだ。なんとなく、店にその湿度と臭気が漂って来そうな感じがして足が遠のいていた。しかし、ネットにそこのホルモン定食が安くて旨いという書き込みがあり、一度入って見たいと思っていた。

アルミ戸の引き戸を開けると4坪ほどの店内には壁際に4人掛けのテーブルが2つ、中央にばらつきのある3つのテーブルを寄せた相席用の、いかにも大衆食堂といったようなスペースが設けられていた。その隅に腰をおろし、回りを見渡すと、長靴に無精髭をのばした、いかにも市場関係者とわかる高齢の馴染みの客といった人達が一仕事終えて疲れた様子で昼飯を食べていた。

壁に貼ってある手書きの値段札をながめると、目当ての「ホルモン定食、４７０円」をみつけ、すかさずそれを注文した。無愛想な婆さんが、すぐに茶を運んで来た。隣の親父に目をやると、たぶん「マグロぶっかけ丼、うどん付き７３０円」らしきものを食っていた。うどんの味は想像できないが、マグロは新鮮で、間違いなく旨いだろうと想像出来る。量からしても、これは安い！相席の前の人はケチャップで作ったような昭和の「オムライス５３０円」を食べている。これも年季のいった、そこそこの味はしているのだろう。「昭和レトロ風オムレツ」と銘打って、こじゃれた店で出すならば１０００円近くするかもしれない。

その小さな店の中を一人で駆け回る70才は過ぎたと思われる腰の曲がった婆さんがいた。この店は午前4時開店だから、すでに8時間は経っている。入り口の引き戸に午後2時閉店と書いてあったが、残り1時間30分程、衰えるような気配は全くない。この婆さんの動きに見とれていたら、目が合ってしまい、「忘れた訳じゃないからね！」と婆さんは気丈に答えた。店の様子を完全に把握していた。暫くして、アルミニュームの四角いトレイから、大盛りのご飯とみそ汁と漬け物に味噌仕立ての煮込んだホルモンを次々に私のテーブルの上に置き、風のように厨房に消えていった。これで４７０円は安いな、と思いながら完食し、満足して立ち上がり、その婆さんに支払いを済ますと婆さんは、一つの仕事が無事完了した喜びなのか、私の顔を見てニッコリ笑って「ありがとう、ございました。」と会釈をした。この婆さん、笑うんだと少しほっとした。

４７０円でコンビニやスーパーで昼飯を買ってきても、食べ物に対してあまり感情というものは沸かないし、満足感というのも薄い。次は「マグロぶっかけ丼、うどん付き」でも食べようかと思う。只、この店に人を誘って来る勇気はなかなかない。私一人で立ち寄る一軒のお店にしておこうと思う。

（藤田和男）

▲素っ気ないくらいの店構え。奥が公衆トイレ。

◀ネギがたっぷりかかったホルモンの煮込み定食。470 円という価格も、その量や味にも素朴な誠意を感じる。

筆者プロフィール

昭和34年熊本市生まれ。福岡、東京でカメラマン修行の後熊本市でフリーカメラマンとして独立。

競馬歴は約20年。JRAに奉納した額はおそらく税金を上回る。